

「情報」の日常的な用法からみた意味

Usage and Meaning of 'Information' in Japanese

石 神 ま り  
*Mari Ishigami*

*Résumé*

Japanese term 'joho' was coined in 1876. The meaning of 'joho' nearly correspond to 'information' in English. This paper discuss the gap between the definition of 'joho' or 'information' in books or papers and the usage of this term in daily life. Many discussions and definitions about the meaning of information by researchers emphasize four common factors; evaluation, acceptance, difference between information and data, and strong relationship to knowledge. Based on the survey of magazines, newspapers, BBS, and TV programs in Japanese, 934 phrases, which include the term 'information', 'data', or 'knowlede', are collected. In some phrases in these media, the term 'information' was used for something not evaluate, or not accept by recipient, and 'data' was exchangeable for 'information'. Finally, categorization of 'information based on the usage in daily life is conducted.

- I. 「情報」についての議論
  - A. 「情報」の語の起源と意味の変遷
  - B. 「情報」と「information」
  - C. 「情報」の既存の定義
- II. 従来の定義の検討
  - A. 「評価」
  - B. 「受容」
  - C. 「データ」と「情報」
  - D. 「知識」と「情報」
- III. 日常における「情報」の使用実態
  - A. 調査目的

---

石神まり：慶應義塾大学文学部図書館・情報学科，東京都港区三田 2-15-45  
Mari Ishigami: School of Library and information Science, Keio University, 2-15-45, Mita, Minato-ku,  
Tokyo 108, Japan.  
1995年2月5日受付

「情報」の日常的な用法からみた意味

B. 調査対象・方法

C. 調査結果

#### IV. 用例の分類

A. 「知る」という観点

B. コンピュータ関連

C. その他

#### V. 日常の「情報」概念

A. 既存の定義との比較

B. 日常における意味

### I. 「情報」についての議論

「情報」は現在広く使われている言葉である。そして、「情報とは何か」という問題は多くの学問分野で多くの研究者によって研究されてきている。「情報」について調査するときには、まずこれまでの研究成果を概観することからはじめなければならない。

#### A. 「情報」の語の起源と意味の変遷

「情報」という言葉は、合成漢語として中国から輸入されたものではない。さねとう・けいしゅうの『中国人日本留学史』によれば、中国人自身が情報を日本来源の中国語と認めているので、情報は漢語ではなく、和語ということになる。例えば上海辞書出版社『漢語外来詞詞典』の情報項には、源は日本で、「關於某種情况的消息和報告，多帶有機密的性質」と記されている<sup>1)</sup>。

通説として「情報」の「鷗外造語説」<sup>2)</sup>があったが小野厚夫<sup>3)</sup>が「情報」のさらに古い用例を発見したため、もはや否定されている。明治 27 (1894) 年から明治 28 (1895) 年の日清戦争の時に『萬朝報』で「情報」という語が使用されており、その後の用例もほぼ軍の広報や戦報に限られている。そこで、小野は当時の「情報」は軍事用語であると考え、兵書を重点的に調べたところ、明治 9 (1876) 年に『佛国歩兵陣中要務實地演習軌典』という翻訳書で、「情報」が使われていることを見つけ出した。この中では「情報」という語が何度も使われているが、これ以前に出版されている兵書を調べてみても「情報」という語が見当たらないことから、おそらくこの本が「情報」という語が使われた最初の出版物ではないかとされている。同書の訳者は酒井忠恕であるが、彼は「情報」に「しらせ」「てきのやうす」という意識をつけている。このことから、酒井は「情報」を「敵情のよう

す、または知らせ」という意味で用いていることがわかり、小野は、「情報」は「情状の報告、または報知」を短縮したものであろうと解釈している。そして「情報」の原語は、フランス語の information か renseignement だが、おそらく renseignement ではないかと推測している<sup>4)</sup>。

酒井は、その後明治 11 (1878) 年に『佛國參謀須知』を訳出し、その折り返し図の中で一度だけ「情報」という語を用いた。これを含めて明治 15 (1882) 年に『野外演習軌典』が制定されるまでに情報という語が現れるのは酒井の著作に限られている。したがって、それまでに「情報」という語はほとんど普及しなかったとみてよい<sup>5)</sup>。

陸軍省は明治 15 (1882) 年 3 月に陸達乙第 18 号で『野外演習軌典』を制定したが、この軌典は酒井の『佛国歩兵陣中要務實地演習軌典』を基にしており、「情報」という語が多数使われている。これが公式文書に現れた「情報」という語の最初の用例ということになる。

そして、「情報」が使われだすと同時に、「状報」も兵書に現れるようになった。「情報」と「状報」の使い方に大きな差異はなく、ほぼ同義語として使われていたものと判断される。ところが明治 20 (1887) 年頃になると、参謀本部や陸軍兵学校で兵語を統一する動きが出て、兵語草案や改正兵語辞典の編集が始まる。これによってどうやら「情報」に統一されたようで、その後「状報」の出現頻度は激減してしまった<sup>6)</sup>。

このように、「情報」は軍用語として使われて来たが、この言葉を一般用語として使うときには、軍人であり、かつ小説家であった鷗外が橋渡しの役割を果たしたということが予想される。明治 44 (1911) 年に『三田文学』に発表された『藤袴絵』という小説の中に「情報」という言葉が頻出する。この小説に出てくる「情報」の意味

は明らかに軍事用語ではあるが、この言葉を軍事に対してではなく、一般向けに用いてみたということになる。

第二次世界大戦後まもなく、情報理論が生まれたが、わが国に導入されたときに訳語に困り、しばらくはインフォメーションとかな書きされていた。しかし、結局は「情報」に落ち着いた。「情報」という言葉に対する戦時中の印象が良くなかったため、この術語が社会に受け入れられるまでにかなりの時間を要したが、昭和40(1965)年頃から一般的に使われるようになり、今日に至っている<sup>5)</sup>。

## B. 「情報」と「information」

それでは、日本語の「情報」と「information」とが、いつ結び付いたのかをたどってみる。小野<sup>4)</sup>によれば、明治から大正時代の英語辞典においては、informationに「情報」は密接に対応していない。「情報」という言葉が最初に現れる英語辞典は、明治35(1902)年に出版されたチャーチルの『英和和英兵語辞典 (A Dictionary of Military Terms and Expressions, English-Japanese, Japanese-English)』であるが、英和編には、

Information 諜報

Intelligence 情報

和英編には、

諜報 Information; intelligence

情報 A state, or tabulated report accounting for every man of a unit.

と記載されている。英和ではinformationに「諜報」、intelligenceに「情報」が充てられており、和英では「情報」にinformationの記載がない。同時期の他の和英辞書でも同様であり、井上十吉の『新譯和英辞典』(明治42(1909)年)と佐久間信恭、廣瀬雄の『和英大辭林』(明治42(1909)年)で「情報」にあてられているのは、reportとadviceであった。

そこで、informationは最初どのように訳されていたかということが問題になる。文久2(1862)年に刊行された『英和对訳袖珍辞書』には、informationの記述として、“教エ、告知、手術、了解、訴エル事”とある。これらの訳語は慶応3(1867)年に『和英語林集成』が刊行されるまで踏襲されている。『和英語林集成』では、“Tayori, otodzre, shirase, oshiye”と記述され、明治6(1873)年の『附音挿図英和辞彙』では“消息、教諭、報告、訴訟、知識”となっている。これ以後の辞書はほとんどがこの2つの辞書の孫引き、あるいは、それに準ず

る訳語を掲載していた<sup>6)7)</sup>。

そして大正4(1916)年刊行の斎藤栄三郎『熟語本位英和辞典』には、intelligenceの訳語の一つとして「(=information)報知、情報」が記載されている。これがinformationおよびintelligenceと「情報」が結び付いた最初の例であるが、この辞書ではinformationの項目には「情報」は現れない。大正10(1921)年の『大英和辞典』では、informationの意味に「通知、報知、報告、報道、消息、情報」を挙げている。以後は、英和辞典のinformationに「情報」が使われるようになったが、すぐに一般的になったわけではない。昭和39(1964)年の勝保詮吉郎の*Kenkyusha's New Dictionary of English Collaction*という英和辞典においてすら、informationは“通報、告知、音信、消息、知識、見聞、告発”となっており、「情報」は出ていない。訳語として定着し、意味の最初に挙げられるようになったのは、ここ20年ほどのことである<sup>8)</sup>。

## C. 「情報」の既存の定義

### 1. 通信理論

様々な情報概念の中で最もよく知られているのは、C. E. Shannonの通信理論<sup>9)</sup>である。これは、“情報は記号もしくは文字列である”と考えて情報の意味や内容を除外してとらえたHartleyの考え方に確率を導入し、通信におけるノイズを考慮に入れて展開したものである。“一定量の不確実性をもつ体系において、不確実性の量を減らす働きをするものが情報である”<sup>9)</sup>というこの理論は、通信以外の分野にも応用されている。例えば、S. Artandiは情報学の文脈の中で情報を検討する場合にShannonの理論を基にすることを提案しているし、J. Belzerは、彼の理論を応用して、情報理論をコーディングの理論に結び付け、さらに意味論的情報の問題に結び付けようとした<sup>10)11)12)</sup>。

シャノンの通信理論は数式化された情報概念のほとんど唯一の成功例と言われているが、情報の意味が問題にされていないところから、情報の一面しか取り扱っていないとの批判もある。

### 2. 図書館・情報学

図書館・情報学においては、J.H. Sheraらによる次のような定義がある<sup>10)13)</sup>。

①情報とは、ある特定の事実、対象、事象に関する知識で、伝達可能な形式をとるものである。ドキュメン

## 「情報」の日常的な用法からみた意味

テーションの意味では、情報は存在、利用、意味内容の三つの要素をもっている。

②実際の効果の点では、情報は既知のものに何かを追加したり、変化させたりするものである。

③情報理論における情報はメッセージの意外性の尺度である。

この①の定義は、知識という概念が曖昧なため、事前に知識を明確に定義しておく必要がある。

### 3. データ、知識との区別

R. M. Hayes と J. Becker は、「情報とはデータ処理の結果として生じるデータである」と定義を下し、データ、情報、知識などの概念を区別している<sup>14)</sup>。

データ、情報、知識の概念を整理しているといえ、A. M. McDonough の見解が有名である。彼はそれぞれの概念関係を次のように定式化している。

データ＝評価されていないメッセージ

情報＝データ＋特定の状況における評価

知識＝データ＋将来の一般的な使用の評価<sup>15)</sup>

### 4. 情報学

N. J. Belkin と S. E. Robertson は、情報という言葉の従来の使用法を検討し、それらに共通しているのは「情報は構造に変化を及ぼしうるものである」という考え方だけであるとした。彼らは、情報現象が見られる範囲の中で、情報学が対象とする範囲を明確にしようとした。従来の定義が、ある限られた文脈・目的の中での定義であったのに比べて、Belkin らは情報学という枠組みの中で、その対象とすべき情報とはなにかを定義しようとしたのである<sup>10)</sup>。そして「情報とは、テキスト（送り手によって意図的に構成された記号の集合）から構成され、受け手のイメージを変えるもの」<sup>16)</sup> という定義を示している。

同じように情報学において情報を定義したのは、B. C. Brookes である。彼によれば、〈知識〉とは相互関係によって結びつけられた構造であり、〈情報〉はこの構造の一部であると定義している。そして、この両者の関係を以下のように表している。

$$K [S] + \delta I = K [S + \delta S]$$

この式は、知識構造  $K [S]$  に情報  $\delta I$  を加えることによって、新しい構造  $K [S + \delta S]$  が生まれるということである。知識の成長は単なる増加ではないし、知識への情報の吸収は単なる追加ではなく、知識構造が変わるのだ

ということを示している。彼は、情報と知識は同類であり同じ単位を使って測定できると強調した<sup>17)</sup>。

### 5. 日本における定義

一方、わが国においては「人間と人間とのあいだで伝達される一切の記号の系列を意味する」（梅棹忠夫<sup>18)</sup>）、あるいは「報の世界に写像された限りにおいての情の世界である」（北川敏男<sup>19)</sup> など様々な定義がある。

以下、いくつか定義を列挙する。

- (1) 情報とは、コミュニケーションそれ自体を構成している意味の実体であり、それはシンボル（言語的・音楽的・絵画的・造型的・動作的）を通じて具現される (B. Berelson)<sup>20)</sup>
- (2) 情報とは、決定過程に価値をもつデータ・エレメントである (中井浩)<sup>21)</sup>
- (3) 意味ある記号の系列 (今井賢一)<sup>22)</sup>
- (4) ①最広義の概念＝物質・エネルギーの一切のパターン  
②広義の概念＝自己保存システム（生体系・機械系・人間系・社会系を含む）一般において、システムの特定の目的に対して意味のある記号ならびに記号の系列  
③狭義の概念＝人間や社会組織のある特定の目的に対して意味のある記号ならびに記号の系列  
データ＝まだ評価づけされていない記号の系列  
情報＝人間と社会組織の特定の目的に対して評価されたデータ  
知識＝将来一般的に使用されうるものとして体系づけられた情報 (香山健一)<sup>23)</sup>
- (5) 「知る」ということの実体化である。つまり、われわれが、あるものについて「知る」ということは、何かしらを得たこと、何かを頭の中に取り込んだことである。その「何かしら」をわれわれは「情報」と呼ぶのである (高橋秀俊)<sup>24)</sup>

## II. 従来の定義の検討

このように、「情報」という言葉の定義はさまざまである。しかしその中で、日常的な使われ方との食い違いがみられる。つまり、通常見聞きするのはずれがあると感じられる点がいくつかある。以下で、この点について整理する。

## A. 「評価」

最初は「評価」である。多くの定義において「評価」という要素は不可欠であるととらえられているようだ。McDonough<sup>15)</sup>は、“情報＝データ＋特定の状況における評価”と定義しており、香山健一<sup>23)</sup>も、“情報＝人間と社会組織の特定の目的に対して評価されたデータ”と、「評価」の点で「情報」と「データ」とを区別している。津田良成<sup>25)</sup>は“価値の評価が加わったデータ”と述べているし、最上勝也<sup>26)</sup>は“「情報」は、人間と社会組織の特定の状況における特定の目的に対して評価されたデータ”としている。また、谷口早吉<sup>27)</sup>は、過去の専門家たちの情報についての意見を概観したうえで、“情報とは、ある目的達成のために必要とする知識であり、目的達成に関連のある諸種の情報資料(素材)を収集、処理(評価・分析・総合)して得られるものである”とまとめているが、ここにも「評価」という点が含まれている。このように「評価」という言葉の含まれる定義はいくつかある。さらに、「評価」に関する最も有名な定義は、上述のMcDonoughのものであるが、彼は著書の中で下のように説明している。

「情報」はここでは特定の状況における評価されたデータに対する表示として使われている。個人がかれの問題の一つを取り出し、かれのもつデータの中に問題解決に役立つ材料を発見したときには、データを情報に変えたりあるいはデータから情報を分離する。…意思決定のために使用される時、データから情報に変わるということに注目されたい。<sup>15)</sup>

つまり彼は、「評価されたもの」とは、「問題解決に役立つもの」であり、「意思決定のために使用されるもの」と説明しているのである。したがって、「評価」という言葉が直接現れていなくても、「役立つ」ものや「意思決定に使われる」ものが「情報」である、という類いの定義も、「評価」を重視している例に挙げられよう。とすると、以下の定義も「評価」の要素が含まれたものと考えられる。

- (1) 情報とは、人間相互のコミュニケーション過程において、特定のシンボルにより象徴された社会生活に役立つ意味内容(北嶋武彦)<sup>28)</sup>
- (2) 情報とは、ある目的を達成するために役立つ知識のことである。資料が判断に役立つような形に体系化されたものを知識と称し、知識が我々の行動

に役立つように体系化されたものを情報という(瀬川正明)<sup>29)</sup>

- (3) 情報とは、情報の送り手が受け手の立場あるいは、質問者の質問の内容を理解し、それに適合した情報を送り手の意図と共に受け手に伝えることにより、受け手に役立つような知識である(藤本理平)<sup>30)</sup>
- (4) 伝達のために選択され組織化されたデータであって表示・記号等の手段によって事象の持つあいまいさ(ランダムネス)を減じ、それを通じて主体の意思決定に影響する機能を果たすもの(宮沢健一)<sup>31)</sup>
- (5) たくさんあるデータの中で、受け手にとって役に立つデータだけが情報である。すなわち、データが判断や意思決定に使われる時情報と呼ばれることになる(岡沢和世)<sup>32)</sup>
- (6) 情報とは、人間個人ないしその集団が問題解決に必要なとする種々のメッセージ(記号ならびに記号の系列)のこと(杉村優)<sup>33)</sup>

「評価」という点を重視している定義を列挙したが、我々は日常において、「評価」されたもの、つまり「役立つ」ものや「意思決定に使用される」ものに対してのみ、「情報」という言葉を用いているだろうか。「情報」という言葉には、必ず「評価」されているという事実が必要なのだろうか。

## B. 「受容」

第二は、「受容」という点についてである。「受容」されたものが「情報」である、ととらえている定義が数多く見られる。

N. Wiener<sup>34)</sup>は情報を、“人間が感覚器官を通して外部から受容・認知した一切の刺激である”とし、さらに野口悠紀雄<sup>35)</sup>がこれを拡張して、情報が“生物および自動制御系を持った機械システムが、その感覚器官を通じて外界との間で交換する全てのものの内容をさす”と述べた。佐々木敏雄<sup>36)</sup>は“見たり聞いたりした個人が頭の中で考えつかんだもの、それが情報なのだ”と言っている。そのほかに加藤秀俊<sup>37)</sup>の“人間が外界から受けることごとくの刺激”などもあり、これらに共通しているのは、「受容されたもの」「受け取られたもの」こそが情報であって、その裏には「受け手」が存在している、ということだ。

「受け手」という視点では、Belkinら<sup>16)</sup>の“情報とはテ

## 「情報」の日常的な用法からみた意味

キスト（送り手によって意図的に構成された記号の集合）から構成され、受け手のイメージを変えるものである”という定義もあり、また細野公男<sup>38)</sup>は、“情報という概念は客観的な実在ではなく、それを必要とする人間の知的活動になんらかの影響をあたえる刺激であり、主観的で受け手志向である”と説明している。高橋秀俊の以下の定義は有名であるが、これは、「情報」は「受け取られたもの」であるという考えである。

情報とは一体何かという間に、一言で答えるならば、それは「知る」ということの実体化である。つまり、われわれが、あるものについて「知る」ということは、何かしらを得たこと、何かを頭の中に取り込んだことである。その「何かしら」をわれわれは「情報」と呼ぶのである。<sup>24)</sup>

しかし、普段我々が「情報」と呼ぶものは、しっかりと受け手に受け取られ（受容され）、理解されたものだけに限られているだろうか。受け取られたという事実がなくても情報が客観的に存在している、ということはないのだろうか。受け取られる前の段階では「情報」という言葉を使っていないのだろうか。

### C. 「データ」と「情報」

「データ」という言葉と「情報」という言葉との関係についても、定義と実際の使用に違いがあると考えられる。「データ」と「情報」との関係については、以下のような定義が存在する。

- (1) 事実の代替物であるデータを、受け手が、自分の知識を増加させるようなやり方でモデル化し、編成し、組織し、交換した結果が情報である。価値の評価が加わったデータということもできる。データは本来、客観的なものでなければならない。…情報を主観的という見方もできる（津田良成）<sup>25)</sup>
- (2) 情報とはデータ処理の結果として生じるデータである（Hayes と Becker）<sup>14)</sup>
- (3) 情報とは、データを利用者の利用目的に合ったように組み合わせたもの（中沢俊一）<sup>39)</sup>
- (4) 伝達のために選択され組織化されたデータであって表示・記号等の手段によって事象のもつあいまいさ（ランダムネス）を減じ、それを通じて主体の意思決定に影響する機能を果たすもの（宮沢健

一）<sup>31)</sup>

- (5) 「データ」とは、まだ評価されていない記号（数字や文字）の系列であり、「情報」はそれらのデータを意味ある形に集め、分析し、まとめることからひき出されるのである。その結果、「情報」は、人間と社会組織の特定の状況における特定の目的に対して評価されたデータになりうる（最上勝也）<sup>26)</sup>
- (6) 情報とは、受け手に知識のレベルを増加させることができるような仕方、データをモデル化し、編成し、組織し、変換した結果である（岡沢和世）<sup>32)</sup>

これらに共通しているのは、「データ」を加工・処理することによって生まれたもの、または選び出されたものが「情報」である、ということだ。これは、「評価」であげた定義とも重なるが、McDonough の“情報は、特定の状況における価値の評価されたデータ<sup>15)</sup>”という定義にも表われている。つまり、多くの定義においては、「情報」は「データ」よりもレベルの高いもの、ランクが上のものであるようにとらえられていると思われる。

さらに、M. U. Porat<sup>40)</sup> の“情報とは組織化され、伝達されるデータをいう”のように、ある条件に限り「データ」を「情報」と呼ぶ例も見られる。

また、「データ」は本来、客観的なものであり、「情報」は主観的なものであるというとらえ方をしているもの<sup>25)</sup>や、杉村優<sup>33)</sup>の定義のように、“情報の物理的実体はデータであり、知識である”と、形態が違うのだと主張するものもある。

これらの定義が示しているのは、「情報」と「データ」とは、レベルにしろ形態にしろ条件にしろ、何らかの違いがあり、同じ土俵で論じるものではないし、次元の違い存在である、ということではなからうか。

### D. 「知識」と「情報」

一方、「情報」を定義する際に、「知識」という言葉と結び付けている研究者もいる。F. Machlup<sup>41)</sup> は、“すべての情報は知識である。”と、高橋秀俊<sup>24)</sup>は“情報の中には、万古不易な真理としての知識も含まれるが、…本当にその瞬間しか意味をもたないような知識もまた情報である”と述べている。杉村優<sup>33)</sup>の、“情報の物理的実態はデータであり知識である”という意見もある。

最も多いのは、「情報」は何かをする際に役立つ「知識」である、というような定義である。例えば、下のよ

うなものがある。

- (1) 情報とは、ある特定の事実、対象、事象に関する知識で、伝達可能な形式をとるものである (Shera ら)<sup>13)</sup>
- (2) 情報とは、ある目的を達成するために役立つ知識のことである。資料が判断に役立つような形に体系化されたものを知識と称し、知識が我々の行動に役立つように体系化されたものを情報という (瀬川正明)<sup>29)</sup>
- (3) 受け手に役立つような知識である (藤本理平)<sup>30)</sup>
- (4) 人間が外界から記憶の中に取り入れた知識 (V. L. Gutenmaher)<sup>42)</sup>

広辞苑では、第二の意味として、“判断を下したり行動を起こしたりするために必要な知識”とあり、大辞林でも二つ目には“ある特定の目的について、適切な判断を下したり、行動の意志決定をするために役立つ資料や知識”という意味がある。これらにおいては、「知識」がある特定の時に「情報」となるとか、「情報」は「知識」の一部であるという見方もでき、両者は密接な関連がある。

小野厚夫<sup>5)</sup>は「知識」と「情報」の使い分けに言及し、彼が“知識または知識の一部を情報という特別な名前で行っているわけではない”と否定しているが、同時に“われわれは情報を知識を含む広い概念で考えて”いると言っているので、「情報」と「知識」が重なり合い、非常に密接に関連しあっているということに変わりはあるまい。

それに対して日常的な用法においては、両者はこれほど重複・類似性があるだろうか。「情報」が「知識」の内容に影響を及ぼすというような関連性はもちろんあるにせよ、「情報」=「知識」という感覚はあまり見受けられない。そこで、この点についても調査を行いたい。

### III. 日常における「情報」の使用実態

#### A. 調査目的

これまで述べて来たように、「情報」という言葉は多くの角度から検討がなされ、さまざまな定義がなされてきている。また、各研究者はそれぞれの研究分野においては矛盾のない定義をしようとしていることが分かった。

しかしこれらの定義は、「情報」という言葉を無意識のうちに使っている人々、つまり多くの一般の人々にとって、違和感のないものであろうか。深い考察をしてきた専門家と、任意の解釈をしている人々との意識の違いは

かなり大きいと予想できる。したがって、「情報」およびそれに深い関係のある「データ」や「知識」の日常的使用実態を調査し、それらが定義と合致しているかを確かめたい。さらに、多くの実例から、「情報」が普通ほどのような意味で使われているのかをまとめてみることにする。

なお、「情報」の日常的使用法については、以前に井口<sup>43)</sup>や最上<sup>26)</sup>の調査があるが、彼らは熟語単位に限って調査を行った。今回は、検討範囲を熟語単位だけでなく、

第1表 調査対象

紙名	情報	データ	知識	
<b>【新聞】</b>				
日本経済新聞	8/1 ~8/10	86件		
	8/21~8/27	74件		
	8/20~8/27		15件	
	8/1 ~8/31		22件	
読売新聞	8/1 ~8/10	104件		
	8/17~8/31	165件		
	8/1 ~8/31		58件	
	7/1 ~7/31		46件	
産経新聞	8/1 ~8/31		30件	
	8/1 ~8/31		12件	
新聞計	329件	73件	110件	
<b>【雑誌】</b>				
日経ビジネス	8/1号	10件	5件	1件
	8/8・15号	11	6	4
	8/22号	11	7	5
	8/29号	15	8	3
週刊文春	8/4号	18	1	1
	8/11・18号	25	4	3
	8/25号	12	2	4
週刊ポスト	8/5号	12	2	1
	8/12号	11	1	5
	8/19・26号	16	2	5
女性自身	8/2号	5	1	1
	8/9号	9	1	1
	8/16号	6	2	1
	8/23・30	9	4	4
日経パソコン	夏合併号	14	11	1
	8/15号	13	30	1
	8/29号	17	25	4
雑誌計	214件	112件	45件	
<b>【BBS (ニュースグループ)】</b>				
合計 (16グループ 13846件)	41件	4件	6件	

## 「情報」の日常的な用法からみた意味

「情報」を含む記事単位に広げ、その中で文脈も考慮しつつ調査を進めるようにした。

### B. 調査対象・方法

新聞、雑誌を主な対象とする。多くの人々に影響を及ぼすと思われる発行部数の多いものを選択した。扱う分野によって「情報」のとらえ方にかかなりの違いがあると考えられるので、広い範囲を網羅するため、時期を平成6(1994)年8月を中心に絞り、できるだけ多くの種類の資料を調べることにした。雑誌についてはビジネス誌、女性誌、一般誌、コンピュータ関連の雑誌を取りあげた。専門的な「情報」の研究者の概念と比較したいので、情報学関連の資料は対象外とした。また、新聞、雑誌だけではメディアに偏りがあるので、電子掲示板(BBS)とテレビにおける使用も調査した。テレビについては番組を特に絞らなかった。

新聞については、日経テレコンを用い、「情報」「データ」「知識」をキーワードとして記事を検索した。雑誌は、これら3語を含む記事を探し、抜粋した。インターネットのニュースグループでもこれら3語が出てくるメッセージを検索した。対象となった媒体とその結果を第1表に示す。なお、テレビは視聴して気づいたものを記録した。

### C. 調査結果

#### 1. 「評価」

「情報」についての定義を概観してみると、「評価」されたものが「情報」であるという考え方が主流であった。そこで、実際の使用例の中で、「評価」以前の「情報」というものが存在しないか、「意思決定に使われ」ない「情報」、「役に立つ」ことのない「情報」が見られないかを調査した。

##### a. 役立つか

まず、McDonoughも述べているように、「評価」の内容の最初は「役立つ」ことである<sup>15)</sup>。「役に立つ情報(文春8/25)」という言い回しはよく見られるが、もし「情報」の意味として「役立つ」という要素が含まれているならば、わざわざ「役立つ」という形容をつける必要はないと考えられる。「情報」の中には役立つものと役立つたないものがあり、「役に立つ情報」という場合には前者を指しているのである。このほかにも

- (1) 役立つ商品情報や生活情報(日経新聞8/27)
- (2) 役に立つ情報(文春8/4)

- (3) 役立つ情報(女性自身8/23)
- (4) ほんとうに役立つ正しい情報(女性自身8/9)
- (5) お仕事に役立つ質の高い多角的な視点にたった情報(日経ビジネス8/1)
- (6) 暮らしに役立つ情報(日本テレビ10/11)
- (7) 商品選択に有用な情報の提供(日経新聞8/10)
- (8) 有用な情報(BBS9/19)
- (9) 実用情報(日経新聞8/26)

など多くの例がみられた。(9)では、その後に“実用性”を“役に立つ、あるいはためになる”と説明しているもので、これも同様とみなされる。

したがって、日常的には「役に立たない」ものも「情報」と呼んでいる、といえる。

##### b. 必要か

次に“必要な情報を取捨・選択し意思決定を下す(日経新聞8/24)”という例に注目すると、これは定義にあったものとかかなり食い違う。定義では、意思決定を下すために取捨・選択した結果、「情報」というものが生まれる、と考えるものが多かったが、この例の「情報」の中には、選択の結果、意思決定に使われることなく捨てられるものも含まれているということになる。“必要な”「情報」だけを選び、「必要でない情報」を捨てるのである。“どの情報が必要でどれが不要か、取捨選択の妙も自然と身につけている(日経ビジネス8/29)”の場合も同様である。また、“有効な情報(読売新聞8/29)”という言い方は有効でない「情報」が、“質の高い情報(日経ビジネス8/22)”という言い方は質の悪い「情報」が、それぞれ存在することを暗示している。このような例は多く見られた。

- (1) 必要な情報を求めて(ポスト8/5)
- (2) 中から必要な情報を引き出し(読売新聞8/25)
- (3) 必要な情報を入手できる(読売新聞8/25)
- (4) 必要な情報を存分にご活用ください。(文春8/4)
- (5) 必要な情報をお手元に(日経パソコン8/15)
- (6) 重要な情報(日経ビジネス8/8)
- (7) お仕事に必要な情報(日経ビジネス8/22)
- (8) 経営上不可欠の情報(日経新聞8/2)
- (9) 何が大切な情報か判断する(日経ビジネス8/1)
- (10) 情報の選択を誤りやすい(文春8/25)
- (11) 情報を集め、うまく取捨選択して(女性自身8/9)
- (12) 情報の質を保つ(読売新聞8/29)
- (13) グローバルな視点にたった質の高い情報(日経ビジネス8/22)

- (14) 情報の価値も日増しに高まっています (日経ビジネス 8/8)
- (15) より高度な医薬品情報 (読売新聞 8/25)
- (16) 最高の情報 (日本テレビ 11/29 0:38)
- (17) 重要な事故情報の把握 (読売新聞 8/24)
- (18) 有力情報が寄せられ (読売新聞 8/10)
- (19) 事件について有力な目撃情報がありました (テレビ朝日 10/11 18:00)

(1)~(8)は「必要な情報」の例, (9)~(11)は「情報」の取捨選択について, (12)~(19)は「情報」の質や重要度に関する例である。つまりこれらの例は、「情報」には必要なものだけでなく、不必要なものや捨てられてしまうものも含まれる場合があることを示している。

#### c. ニーズに合うか

さて、「評価」される際には、「情報」がその受け手のニーズにあっていないか否かが問題になってくる。いくつかの定義にあったように、受け手のニーズに合わないものは単なる「データ」であって、受け手が欲して初めて「情報」となり得るのである。しかし、実際の使用においては、その制限はないようだった。“ニーズに応じた情報を提供する (読売新聞 8/10)”, “取引先が欲する情報 (日経ビジネス 8/8)”, “耳寄りな (=聞きたいと思う) 情報 (文春 8/4)”, “耳寄りの情報 (フジテレビ 11/19 18:28)”, “的確な情報 (読売新聞 8/8)” などがあつた。また、“読者が情報内容に対する満足感の意思表示として文章に対価を払う (日経パソコン 8/29)” システムの説明においては、満足する (ニーズに合う) か分からない時点で既に「情報」という言葉を使っていた。つまり日常的には、ニーズに合わないものも「情報」と呼ぶ場合があると言える。そうでなければ“お望みの情報 (BBS9/21)”とか“どうでもいい情報 (BBS9/21)”とかいう使い方はあり得ない。読売新聞に、“情報を多数の相手に同時に流せる通信網 (読売新聞 8/30)”の記事があつたが、その「情報」をその受け手は“知りたくもない案内”と言っているので、ニーズに合っていない「情報」の一つと言えるだろう。

#### d. 行動を決定するか

「情報」とは、“行動の意思決定または選択に役立つ<sup>15)</sup>”性質を持つはずだが、実際はそうとも限らない。“(利用者から苦情を言われた NTT が)「発信元との間でそうしたトラブルがはじめているとの情報は聞いている。ただ、運輸の方法はあくまで発信元の自由ですから…」と困惑している (読売新聞 8/30)”という記事では、

NTTは「情報」を受けながらも何も対処しなかった、つまり「情報」が自分に関係なかったことになるが、それでも「情報」という言葉を用いている。また、“以前から、…という情報はありました (女性自身 8/9)”というコメントをした人は、「情報」という言葉を使いながらも、その「情報」に対して何もしていなかった。

したがって、実際に「行動の意思決定に役立った」という事実がなくとも「情報」という言葉を用いる場合もあると言える。

#### e. 正しいか

役立つとか意思決定に使われるという「評価」の観点からさらに敷衍すると、「正誤」の点に触れることになるだろう。「情報」が手に入っても、それが間違っていれば役に立たないし、判断の材料にもならない。そこで、「評価」されたものが「情報」であるとするなら、「情報」は「正しいものである」という考え方が根底にあると思われるしかし、日常の実例を見る限り、「情報」は正しいものだけではないようだ。

例えば、“誤った情報による警察の行動 (日本テレビ 10/28 23:22)”, “この中には誤った情報もあつた (日本テレビ 10/28 23:24)”, “…という情報は誤り (ポスト 8/5)”, “一連の情報について、事実無根と強く否定した (読売新聞 8/26)”, “「侵攻準備」の情報を否定した (読売新聞 8/4)”, “情報の信頼性には疑問符がつく (日経新聞 8/24)”などは、もし「情報」が正しいもののみを指す場合には成り立たない。“談合情報とは別の会社が落札 (読売新聞 8/12)”した時の「情報」も、結局誤りだったことになるし、“議会在 2:00 から始まるとか 3:00 から始まるとか、そういう情報だけ流れて (フジテレビ 10/4 15:06)”という例でも、結局 3:00 を過ぎた時点でまだ始まっていないことが分かっているので、誤った「情報」であつたといえる。

また、“捏造情報 (読売新聞 8/4)”, “ニセ情報 (読売新聞 8/4)”, “でっちあげの情報 (文春 8/11)”, “情報は捏造に過ぎない (読売新聞 8/4)”, “(その情報は)「全くとでっちあげ。」 (読売新聞 8/26)”など、その内容が真実ではなく作り上げられたものである場合にも、「情報」を使っていた。

次に挙げるように、内容の真偽が不明の時にも「情報」と呼んでいた。

- (1) 不確かな情報 (読売新聞 8/21)
- (2) 情報が真実かどうか (文春 8/4)
- (3) この情報の信憑性はどうか (ポスト 8/19)

## 「情報」の日常的な用法からみた意味

- (4) 情報の信憑性があると判断した (読売新聞 8/2)
- (5) 情報の真偽を知っている (BBS9/20)
- (6) 未確認情報もある (読売新聞 8/2)
- (7) この情報を裏付ける他の情報はない (読売新聞 8/24)
- (8) 情報があったようだけど、発信者の名前もなく、名乗りもあげてこないで、事実かどうか確認しようがない (女性自身 8/23)
- (9) 伝聞などに惑わされず、きちんとした情報を得る (読売新聞 8/1)
- (10) 憶測を交えた情報が飛び交う (読売新聞 8/26)
- (11) 興味本位の情報 (文春 8/25)
- (12) 情報は明確ではないが、恐らく、…と思われる (ポスト 8/5)
- (13) あいまいな情報 (BBS9/19)

そして、「正しくない情報」や「あいまいな情報」があるからこそ、それに対して“正しい情報 (日経ビジネス 8/22)”, “科学的信頼性の高い情報 (日経新聞 8/24)”, “正確な情報 (文春 8/11; 読売新聞 8/25; 日経ビジネス 8/29)”, “正確な映像情報 (日経ビジネス 8/22)”, “確かな情報 (読売新聞 8/10)”, “貴重な情報 (女性自身 8/9)”, “信頼できる確かな情報 (女性自身 8/9)”, “100% 確実な情報 (ポスト 8/19)”, “確定情報 (読売新聞 8/10)”などの言い方がされるのである。

もう一つ、真偽が明らかでない「情報」の例を挙げておきたいと思う。「情報通り」という言い方である。

- (14) 情報通りの業者落札 (読売新聞 8/22)
- (15) 情報が寄せられ、22日、情報通りの業者が落札した。(読売新聞 8/22)
- (16) 談合情報が寄せられ、市がそのまま入札を行った結果、情報通りの業者が落札 (読売新聞 8/8)
- (17) 事前情報が寄せられた四工事については情報通りの企業体が落札した。・・・情報通りの企業体が落札したことについて・・・ (読売新聞 8/31)

結果が出るまでこの「情報」が正しいのかは分からない。そして結果がもし「情報通り」にならなければ、この「情報」は正しくなかったことになる。

以上の実例より、「情報」の中には正しくないものや正誤がはっきりしないものも含まれているということが分かる。

## 2. 「受容」

「情報」の定義に「受容」が大きな位置を占めているこ

とは先に述べた。そこで我々が「情報」と呼ぶものが、本当に受け手に「受け取られた」ものだけなのか、客観的に存在するようにとらえられている場合はないのか、受け取られる前の段階においてはどのような名称で呼ばれているのかを調査した。

### a. 受け取られない「情報」

まず、受け手に受け取られたという事実がなくても、「情報」という言葉を使用する場合があるといえる例が見つかった。

- (1) 顧客に最新の製品情報が伝わっていない (日経ビジネス 8/8)
- (2) どうすれば顧客に最新情報を伝えられるか (日経ビジネス 8/8)
- (3) 外部には情報を流さない (日経ビジネス 8/8)
- (4) 「情報」を彼らが独占していた (読売新聞 8/28)
- (5) 独占的な情報 (読売新聞 8/17)
- (6) 情報が止まってしまった (読売新聞 8/29)
- (7) 情報が遮断されている (ポスト 8/5)
- (8) そういった情報は聞いていない (日経新聞 8/25)
- (9) これを確認する情報は得ていない (日経新聞 8/24)
- (10) 情報は届かない (日経新聞 8/24)
- (11) 常任理から外れると情報入らぬ (読売新聞 8/29)
- (12) 何も情報が入らない (BBS9/16)
- (13) 情報などほとんど知らない (ポスト 8/12)
- (14) 情報をつかみかね (読売新聞 8/25)
- (15) 情報は把握が難しい (日経新聞 8/3)
- (16) 収集できない情報 (ポスト 8/5)
- (17) 情報は集まらない (ポスト 8/5)

(3)~(5)にある「情報」は、送り手が“流さな”かったり持ち主が“独占し”たりしているのだから、受け手に「受容」されているはずがない。たとえ流しても、(6)(7)のように“止まって”しまったり“遮断されて”しまえば、やはり受け手には受け取られなくなるが、これらも「情報」と呼ばれている。(8)~(17)の場合は、「情報」が誰にも受け取られていない、つまり受け手が一人もいない、とは限らない。しかし、たとえ他の誰かに受け取られているにせよ、本人が受け取っていないということは確かである。これらの例によって、自分自身が受け取っていないものについても「情報」という言葉を使っているということが明らかになった。

「情報の爆発」「情報の氾濫」などはよくきかれる表現であるが、これらは、「情報」が受け手にきちんと受け取

られていないことを表している。存在する「情報」が多すぎて、「受容」しきれないのである。今回の調査では、「情報の混乱（日経新聞 8/24）」、「化粧品情報はあふれ（読売新聞 8/3）」、「氾濫している情報をどうとらえるか（読売新聞 8/1）」、「情報は氾濫している（文春 8/4）」、「情報がちまたにあふれ（日経ビジネス 8/22）」などの例が見つかった。

#### b. 求められる「情報」

“情報がほしい（読売新聞 8/17）」とか“情報提供を求める（日経新聞 8/24）」とか言う時、その人（「情報」の受け手となる人）は、まだ自分は受け取っていないけれど「情報」は存在するもの、としてそれを求めている。これには下の例が当てはまる。

- (1) 情報を受けたい（読売新聞 8/29）
- (2) 情報が知りたい（ポスト 8/5）
- (3) 情報をお寄せください。（日本テレビ 11/8 14:07; 11/29 0:38; フジテレビ 11/19 18:28）
- (4) 情報を知らせよう求められる（日経新聞 8/2）
- (5) 情報開示を求めて行く考えだ（日経新聞 8/2）
- (6) 情報を求める声が強まっている（読売新聞 8/25）
- (7) 情報の提供を求める（日経新聞 8/10）
- (8) 情報提供を呼びかける（日本テレビ 11/23 23:20）
- (9) 情報提供を依頼した（読売新聞 8/16）
- (10) 情報提供を望みたい（読売新聞 8/17）
- (11) 情報公開を請求した（読売新聞 8/27）
- (12) 情報をお待ちしています（フジテレビ 11/19 18:28）

また、「どなたかこの旅行代理店の情報を御存知ありませんでしょうか？（BBS9/18）」という文があった。この発言をした人も、当然その「情報」について知らないし、まだ受容していない。それでも「情報」という言葉を使い、それが存在するものとした上で、その「情報」を知っているかどうかたずねている。「情報をご存知でしたら、ご紹介できれば幸いです（BBS9/18）」、「他の作品の情報をご存じの方、フォローをお待ちしています（BBS9/21）」、「情報ってどこにいけばわかるんでしょう（BBS9/22）」のようなものも、「受容」していない、存在の有無すら知らないものを「情報」と呼んでいる例である。「患者が自由に自分の薬の情報を知る（日経新聞 8/24）」、「より早く情報を知ることができる（日経ビジネス 8/8）」、「被害を未然に防ぐには、その情報をいち早くつかむことが重要だ（読売新聞 8/24）」なども、「情報」

が客観的に存在していると考えられていると考えられる。

#### c. 「情報」の有無

「情報」がものと同じように「ある」「ない」と言っている例も見られた。

- (1) 本や情報が自分の学校や地域の図書館にない（読売新聞 8/25）
- (2) そのような情報はない（読売新聞 8/25）
- (3) 情報は無かった（読売新聞 8/13）
- (4) 情報はなく（読売新聞 8/2）
- (5) 情報をもっていない（女性自身 8/23）
- (6) これだけしか情報はないのですが（BBS9/19）
- (7) 情報でもあれば御教下下さい（BBS9/19）
- (8) 情報がありましたら（日本テレビ 11/8 14:07）
- (9) 情報がある（読売新聞 8/16）
- (10) 情報もあって（TBS 11/23 15:50）

#### e. 客観的な「情報」

これらの例を見ると、「情報」が物理的・客観的にとらえられることもあると言える。定義にみられた通り、もし「情報」が、主観的で、「受け手」に「受容」されたときに限って「情報」と呼ばれるのなら、「人々が同じ情報を共有し（読売新聞 8/28）」たり“あらゆる情報を共有する（日経ビジネス 8/8）」ことは不可能であろう。“誰でも電話を使って同じ情報にアプローチできる（ポスト 8/5）」システムとはいっても、「情報」は「受け手」の受け取り方、理解の仕方によるのだから、「同じ情報」にアプローチすることはできそうにもない。“一般的な情報（日経ビジネス 8/29）」というものもある。“（データベースに）日々最新情報を追加、収録中（日経ビジネス 8/1）」、「サービスの内容は、…一般的ながんの情報も含まれている（読売新聞 8/29）」という使い方をしているが、受け手に検索されるまでは「情報」とは呼べないことになる。便宜的にしろ、受け取られる以前から「情報」と呼ぶ例もあるということは確かだ。“マルチメディア社会では情報の受け手が主役になるチャンスを得る（日経新聞 8/26）」という文は、「現在の社会では情報の受け手は主要な要因ではない」ということを暗示しているように思われる。

#### 3. 「データ」と「情報」の違い

##### a. 「情報」と「データ」の混同

先に述べたとおり、定義においては、「情報」と「データ」とはレベルや形態が違うとするものが多かった。に

「情報」の日常的な用法からみた意味

もかわらず、一般的に「情報」と「データ」とは似たようなものととらえられ、同じように扱われている場合が目につく。今回の調査において、文中に現れる「データ」を「情報」に置き換えてもその文の意味が変わらな

いものが数多く見られた。そのことを明確にするため、それぞれの語の後につく言葉を抜粋した(第2,3表)。まず、「情報」に続く言葉を見てみる。アは、「情報」には流れがあることを示している。そのため広まったり

第2表 「情報」に続く言葉

<p>ア</p> <p>の流れ の流通 の逆流 を流す が伝わる が早い が漏れる が駆け巡る が飛び交う の関所 が遮断される が止まる の広域化 が広まる が集中する</p>	<p>を売り付ける を漏らす 公開 開示 を載せる を掲載する を販売する を盛り込む を押し付ける をファックスする</p>	<p>に接する を知る を知っている を知らない を理解する が分かる を把握する を携える を抱える を所有する を持っていない を独占する を覚える を記憶する が集まる を集める 集め 収集</p>	<p>操作 の分析 処理 を記入する を記録する を読み出す を書き込む を登録する 活動 管理 をまとめる を統合する を集約させる を総合する を整理する を仕分けする を圧縮する を変更する を追加・収録する を付加する を追加する を更新する を表示する を調査する を調べる の強化 を強化する</p>	<p>ク</p> <p>がある はない は少ない が少なくなる を少なくする が乏しい が不十分 不足 があふれる の混乱 が氾濫する</p>
<p>イ</p> <p>を送信する を発信する を送る を送り込む を送り出す を送付する を与える を提供する を知らせる を出す を通告する を通報する を発表する を張り出す を届ける を運ぶ (上に)上げる を入れる をくれる を教える を伝える を伝送する 伝達 を寄せる の紹介 を紹介する を持ち込む を持ってくる をもたらす</p>	<p>ウ</p> <p>を受け を受け取る の受け手 の受信 を入手する を手に入れる が手に入る をつかむ をもらう を得る を取る をとらえる に耳を傾ける に注目する を読む を見る を参照する を目にする の閲覧 を取り出す を引き出す をキャッチする を手にする を仕入れる を取り込む を取り寄せる を取得する を聞く が届く が届かない が飛び込む が入る が舞い込む に触れる</p>	<p>エ</p> <p>を募集する を求める を受け付ける を訊ねる を検索する を探索する にアクセスする にアプローチする がほしい の需要</p>	<p>カ</p> <p>を蓄える の蓄積 を蓄積する を集積する を収録する をプールする をストックする を保存する を保管する</p>	<p>ケ</p> <p>の生産 を作る を複製する</p> <p>コ</p> <p>センター システム ネットワーク サービス 担当者 技術 番組 員</p>
		<p>オ</p> <p>を扱う を取り扱う を生かす を利用する を活用する を使う を使いこなす を駆使する の消費 を選び出す を選ぶ を選択する を取捨選択する 加工する 加工</p>	<p>キ</p> <p>交換 交流 をやり取りする の送受信 を送受信する を受発信する を共有する</p>	<p>サ</p> <p>を説明する を添える に対応する に群がる を否定する が囁かれる に変換する を守る を保護する 情報照会 をオープンにする を読み上げる が載る が満載 を含む が気になる</p>

第3表 「データ」に続く言葉

ア	を流す を転送する を移動する	オ	を利用する を活用する を使う 共用 を転用する を駆使する を処理する を管理する 操作 を統合する をまとめる を整理する を加工する を分析する の解析 を暗号化する を標準化する を表示する を示す を複写する を写す を入力する を出力する を書く の書き込み を記録する を収録する を登録する を並べる を弄ぶ を検証する に変換する を集計する の抽出 を埋め込む を貼り込む を貼り付ける を編集する をコピーする を修正する を絞り込む を読み出す を圧縮する		をアップロードする を審査する を書き換える を回転する を編集する を扱う を読み込む を取り込む を変換する を更新する を格納する を印刷する をレイアウトする を録音する を再生する をリンクする を写す を並べ換える を書き換える をバックアップする を比較する を収める を抜き出す を保持する を守る を取り返す を壊す 計算	ク	が存在する がない がある が少ない 豊富 量
イ	送信 伝送 を送る を提供する を出す を提出する を公表する を報告する を発表する を中継する を運ぶ を届ける を持ち込む を載せる を搭載する					ケ	を作成する を作る
ウ	を入手する を得る を取る を取り込む に触れる を見る を参照する を観察する を見直す を回覧する を閲覧する を読む を読み込む を持つ を記憶する を盗む の収集 を収集する を集める			カ	を蓄積する を保存する をためる をプールする を収める	サ	で裏付ける が明らかになる に基づく は語る が示す が消失する が消える を上積みする が必要 が大きくなる を適用する が入っている を預ける を装備する が付属する が現れる
エ	を検索する を受け付ける をほしい			キ	をやり取りする を送受信する を通信する 互換を交換する を共有する		

集中したりするし、途中で止められたり遮断されたりもする。イは「情報」を他人に与える場合、そしてウがそれを集め、受けて把握する場合の述語である。受け手側では、受け取る前に探し求める場合(エ)もある。そして受け取った「情報」を、オに表れているように使ったり処理したりして取り扱う場合もあれば、蓄積しておく

場合(カ)もある。キは、「情報」の交換、やり取りの言い回しである。やり取りをした結果、「情報」を共有することになる。クは存在と量に関するグループである。ケによれば、「情報」は作られることもある。コは「情報」を扱う機関、そしてその他がサである。これに沿って「データ」に続く言葉を見て行くと、ア～サそれぞれのグ

## 「情報」の日常的な用法からみた意味

ループにおいてほとんど対応するものが見つけられた。したがって、「情報」と「データ」とはほぼ同じように用いられているということが明らかになった。

さらに、「データ」という言葉と「情報」という言葉を混在させ、区別せずに使用している例も発見された。

- (1) 物質情報と地球観測データの二分野について（日経新聞 8/27）
- (2) エイズ研究の最新の情報とデータを得られる（日経新聞 8/8）
- (3) 情報やデータを送る（日経ビジネス 8/22）

これらの文においては、「情報」と「データ」を並べ、それぞれを同等に扱っている。“設計情報、図面などを…”と言った後、“図面”を“図面データ”と言い換えている記事（日経新聞 8/7）もあったが、この場合も結果的には「情報」と「データ」とを並べていることになる。

- (4) 文書などを電子データに直し、無料で公開している。この情報を「インターネット」を使って取り寄せる（日経新聞 8/26）
- (5) 他の病院と画像情報をやり取りして…。画像データを病院から通信回線を使って入手…（日経新聞 8/22）

(4)において“この情報”というのは、その前の“電子データ”のことを指している。“個人情報”と“出勤データ”を合わせて“このデータ”と言っている例もあった（読売新聞 8/18）。(5)の場合、同じ内容を繰り返すのに、前半では「情報」、後半では「データ」という言葉を用いている。同様に、一つの記事内で“地図データ”、“地図以外の情報”、“地図情報”という風に「データ」と「情報」を区別せずに使っている例（日経ビジネス 8/29）もあった。この記事は、“足で集める正確な地図データ”を“一つ一つの情報を文字通り足を使って調査する。”と説明していたり、“正確な情報が不可欠だ”と“正確なデータがあってこそ”とを同じ意味で使っていたり、かなり恣意的に言い換えている。

- (6) 日本は情報を取るだけで、出さない・・・自分の会社の開発に必要なデータは欲しいけれど、自分のところのデータは出さない。それと、公開する情報と、そうじゃない情報の仕分けができていない（日経ビジネス 8/22）
- (7) 消費者情報を蓄積する。…個人データの収集に努めている。…個人情報を蓄積している。花王は日本でも有数の消費者データを持っている会社だ。…顧客情報をいつでも検索できる。…顧客に会っ

て、さらに掘り下げたデータ収集も行える（日経ビジネス 8/29）

これらにおいても、「情報」と「データ」は交換可能で、区別せずに使われていた。

### b. 「データ」と同じ意味の「情報」

「情報」と違い「データ」は客観的で、コンピュータに蓄積できるのは「データ」であるとする考え方が強い。しかし、日常的な実例を見ていくと、「情報」がコンピュータに蓄積され、処理され、伝送されている、という用法が目立った。つまり、これは「データ」という意味で「情報」が使われてしまっているということであろう。実例を下に列挙する。

- (1) コンピューターに収められた情報（読売新聞 8/8）
- (2) CD-ROM に記録してある地図情報（日経新聞 8/27）
- (3) 情報を伝送する光ファイバー網（日経新聞 8/25）
- (4) 有線系の通信基盤は、大容量の情報が伝送できる（日経新聞 8/10）
- (5) 全情報がホストを経由する現行システム（日経新聞 8/9）
- (6) 情報をコンピューターで収集・提供する（日経新聞 8/3）
- (7) （光磁気ディスクは）磁気的な性質を変化させて情報を書き込んだり…情報を何度でも消去、再書き込みできる（日経新聞 8/2）
- (8) 情報を画像として蓄積する電子ファイルシステム（日経新聞 8/2）
- (9) 光の点滅による信号で情報を送る光通信（読売新聞 8/29）
- (10) 電波よりも早く大量の情報を送れ（読売新聞 8/29）
- (11) 映像、音声、データベースなど複数の情報をコンピューター上で一括して扱う（読売新聞 8/21）
- (12) 情報を高速で送ることができる通信回線（文春 8/4）
- (13) 映像情報は電磁気の形でディスクドライブに圧縮されて保存されている。…圧縮された映像情報を解凍して画面に流す（ポスト 8/5）

“電子メールも情報の混乱をもたらすだけに終わってしまうかも知れない（日経新聞 8/24）”という文があったが、定義では「情報」は目的に対して「評価」された主観的なものとされているので、電子メールがもたらすの

は「データ」の混乱だといえる。そのほか、“データのやり取り”をしたり“データを送る”時の通り道を、“情報の道筋”と言っているものもあった(読売新聞8/9)が、厳密に言えば「データ」の道筋、になるだろう。

(14) 都市銀行の多くはこれまで、顧客情報などをホストコンピュータで一括処理してきた。しかしホストコンピュータの情報だと画一的で、支店の細かな必要に応じた情報加工が難しく、次々に出てくる金融商品の勧誘のための情報づくりなどに対応できなくなってきた(日経新聞8/9)

この文には四つの「情報」が出てくるが、それぞれ違うものだ。最初と二番目の「情報」は、コンピュータに蓄積された「データ」を指す。そして「データ」から「情報」に変化するための「情報加工」のプロセスを経て、役に立つ「情報」(四番目)になるのである。

“手書きで情報を集め、分析結果を冊子にして提供しているが(日経新聞8/3)”という文における「情報」も「データ」を指しており、それを分析した“分析結果”こそが、定義で言われる「情報」であるといえよう。分析される前にはまだ「データ」であるなら、以下の「情報」も「データ」の代わりに使われていることになる。

- (19) 情報の収集、分析、交換のため(読売新聞8/22)
- (20) 武器はさまざまな情報とその分析力だけである。(日経ビジネス8/1)
- (21) 情報の分析力(日経ビジネス8/1)
- (22) 集めて来た膨大な情報を分析し、戦略的に組み立てる(日経ビジネス8/1)
- (23) さまざまな情報を詳細に分析する(日経ビジネス8/1)

以上の例から分かるように、「情報」は「データ」の意味としても使われることが多い。「情報」と「データ」との区別はあまりはっきりしておらず、「データ」という言葉よりも「情報」という言葉を多用している。このことは、各雑誌と新聞の両者の出現件数を比較すれば明らかである。各記事数を表にしたのが第4表である。

#### c. 「データ」の特徴

「情報」と「データ」は混用されているが、「情報」を使わず、あえて「データ」を使うのはどのような時だろうか。まず第一に、コンピュータ関係の場合には「データ」が使われる可能性が増える。このことは、第3表のオのグループ内で、“リンクする”、“バックアップする”等、コンピュータ用語が多いことにも表れており、第4表で『日経パソコン』や『日経ビジネス』における「デー

第4表 出現記事数

紙誌名	期間	情報	データ	知識
日経新聞	8月分	304	297	22
読売新聞	8月分	333	58	30
産経新聞	8月分	203	84	12
毎日新聞	8月分	474	127	79
朝日新聞	8月分	913	132	86
日経ビジネス	8月分	47	26	13
週刊文春	8月分	55	7	8
週刊ポスト	8月分	39	5	11
女性自身	8月分	29	8	7
日経パソコン	8月分	44	66	6
合計		2441	810	274

タ」の割合が高いことにも表れている。

しかしそれよりも、数値的・統計的なものに対しては、「データ」を用いることが圧倒的に多いといえる。それは以下の使われ方を見れば明らかである。

- (1) 価格データ(日経新聞8/22)
- (2) 観測データの分析(日経新聞8/20)
- (3) 時間の比較データ(読売新聞8/30)
- (4) 視聴率データ(読売新聞8/22)
- (5) 消費者物価指数のデータ(読売新聞8/19)
- (6) (血糖値の)記録データ/血糖値変動データ(読売新聞8/8)
- (7) 統計データ(日経ビジネス8/8)
- (8) データをグラフ表示できる(読売新聞8/27)
- (9) 二百年分の気象データを使って統計的に処理(読売新聞8/20)
- (10) POSに出てくる毎日のデータ(日経ビジネス8/1)
- (11) 推定データは年によって数万～十数万の差が出ている(日経ビジネス8/8)
- (12) 客観データで方程式を作り(読売新聞8/19)
- (13) データでは平均気温は28.2度で(読売新聞8/1)
- (14) プロ入り2年目、20才などというデータ(ポスト8/19)
- (15) (雨量が)九十ミリ下回っている。このデータだけでも…(読売新聞8/30)
- (16) 進学率が初めて20%を突破するなど多くの特徴的なデータ(日経新聞8/27)

これらの場合において「データ」の内容は、数値や統計である。89年からの折れ線グラフに“89年以前のデータがない(日経ビジネス8/1)”という注がついたも

「情報」の日常的な用法からみた意味

のがあったが、この場合も「データ」はグラフに記入すべき数値であった。“タイムレコーダーに通し、出退勤データを記録（読売新聞 8/18）”の「データ」の内容も、出退勤時刻なので数値になる。

以下の例は、「データ」の内容が何であるかを説明したものだが、これらは統計やアンケートの結果などで、数値を列挙しているものが多かった。

- (1) 進学率 43.3% など、具体的数字（日経新聞 8/27）
- (2) 平均気温、最高気温などの数値（日経新聞 8/20）
- (3) アンケート結果を%で列挙（読売新聞 8/30）
- (4) 自動車の登録台数、生産数など（読売新聞 8/29）
- (5) 気温変化の様子（読売新聞 8/24）
- (6) 経済成長率の%（読売新聞 8/22）
- (7) 足のサイズ、%（読売新聞 8/20）
- (8) 節水効果の%、リットルなど（読売新聞 8/17）
- (9) CATV 普及率と契約世帯数を列挙（読売新聞 8/8）
- (10) 消費者物価などの指数を列挙（読売新聞 8/1）
- (11) 病気改善の効果%（女性自身 8/23）

さらに、“音声は流れないで文字情報とデータ情報だけを受信する（日経ビジネス 8/22）”，“文字情報やデータを送る（日経ビジネス 8/22）”のように、「データ」＝「数値」として扱い、「データ」と文字とを対比している例まで見つかった。

4. 「知識」と「情報」の違い

a. 「情報」と「知識」に続く言葉の違い

「情報」は「知識」である、「情報」は「知識」の一部である、「情報」は「知識」を含む、など「情報」と「知識」の密接な関わりが、定義の中では主張されていた。そこで、日常生活においても両者がそのようにとらえられているかを確認する。そのために、それぞれの後に続く言葉に注目し分類した。

「知識」に続く言葉の第 5 表において、①のグループは、体内に取り込む過程とその結果を表す動詞である。②のグループは、“培う”、“高める”、“磨く”など、取り込んだ「知識」を自分で育て、深めていくものだとすることを表している。③は、自分がかもつ「知識」を活用し、生かしていく時の述語群である。④のグループは、“ある”、“ない”、“乏しい”など量に関するもの、⑤は、“教える”、“提供する”、“教育”など、他人に「知識」を与える場合である。そして残りの例をまとめて⑥グループとした。

第 5 表 「知識」に続く言葉

①	を得る を習得する を獲得する をいただく が伝わる を聞く を学ぶ を習う が分かる を吸収する を身につける が身につく をもつ を共有する を詰め込む の詰め込み を積む を知っている をストックする を備える	⑤	の普及 の啓発 を教える を教え込む を提供する を与える を紹介する を伝える を解説する を指導する 教育 をもたらす を持ち込む を（本に）入れる
②	を培う を高める を深める が深まる を磨く は完璧	⑥	を誇りにする を誇る 人 文明 を問う を盗む にアクセスする を習熟する が必要 は必要ない が不要 はいらない が求められる を求める が要求される 集約 押し込みにくい 表現 が正しい は正確だ は不正確 を還元する を満載する が流出する 交換
③	を生かす を駆使する を応用する を活用する を示す を総動員する を試す		
④	がある がない が豊富 が豊富になる が不足 が不十分 が乏しい に欠ける が増える		

以上の分類をしたうえで、「情報」の場合（第 4 表参照）と比較した。まず、①についてだが、いくつかを除いて、“身につける”、“詰め込む”、“積む”など「情報」の後には続かないものが多い。②についても、「情報」を

“培う”ことや“深める”ことはない。したがって、体内に蓄積され、育てられていくという性質は「知識」に固有のものであり、「情報」にはないといえる。④においても、この場合の“ある”，“ない”は存在するか否かというよりも、「人が持っている」かどうかを表している。“不足”にしても、「人があまり持っていない」時に使うのであって、「体内に蓄積されている」ということがポイントになっていた。

④と「情報」のクは共に，“ある”，“ない”と量に関するものだが、違いがある。クには“氾濫”，“混乱”などがあるが、「知識」に続く言葉としては、今回の調査では見当たらなかった。「情報」はあり過ぎて氾濫したりあふれたりすることもあり得るが、「知識」は体の中に蓄積されたものを指すため，“豊富になる”ことはあっても“氾濫する”ことはないのだろう。⑤は、相手に与えるという意味の動詞であり、イと似ている。ただ、「知識」を与える場合には“教え込む”，“教育”，“啓発”，“親から子に伝える”など、「情報」の場合と比べると目上から目下に教えてやるというニュアンスが強い。となると、「知識」は高貴なものとしてとらえられていると感じられる。このことは⑥のいくつかの例にも表れている。例えば“知識人”は「情報屋」よりも格が上というイメージがあるし、「知識」を“誇りにする”場合もある。

一方、「情報」にあって「知識」にない性質は、ア、エ、キ、ケ、コである。「情報」には“流れ”があり，“探索”されたり“募集”されたりする。他人と“やり取り”や“交換”できるのも「情報」だけである。「知識」はやすやすと“生産”されはしないし、それを扱う「知識センター」や「知識サービス」等はある得ない。

「知識」と「情報」それぞれの中で、今回の調査において数の多かったものをいくつか挙げてみると、

「知識」：を持つ/がない/がある/を身につける/を学ぶ/を得る/を詰め込む/を備える/を深める/を生かす

「情報」：を提供する/収集/交換/を発信する/公開/を寄せる/管理/を得る/がある/を入手する/を流す/開示/を共有する/センター/サービス/を集める/を検索する/を利用する/システム/をやり取りする/処理/の分析/を表示する

というようになった。重複するものも含まれるが、ほとんどのものは特有の言い回しで、「情報」を「知識」に、又は逆に交換することはできないものばかりだった。したがって、「情報」と「知識」は全く別のものとしてとらえられていることになる。

第6表 「知識」の前につく修飾語

レベルに関するもの	基礎 基本的な 基本 基礎的な 初歩 初歩的な 最低限の なまはんかな …程度の …レベルの 高度な 難しい 進んだ	そ の	正しい 正確な 不正確な 確かな 必要な 重要な 実用 役立つ 生きた 言葉の上だけの 生活する上での 断片的な 自己流の 付け焼き刃的
詳しく関するもの	----- 専門家に引けをとらぬ 専門 専門的な 一般的な 常識となっている 特殊な 深い 幅広い 詳しい 細かい おおまかな	他	豊かな マメ 予備 ストックしなげ いけない

b. 「知識」の性質

次に、「知識」の前につく修飾語を調べてみた（第6表）。これによって、「知識」には基礎的・初歩的なものから深い、難しい進んだものまでレベルがあること、一般的なものから専門的なものまで詳しくに違いがあることがはっきりした。これは、「知識」が深められ、高められるものだとすることを裏付けている。

調査をしていて目立ったのは、「経験と知識」「技術と知識」のように、「経験」や「技術」を「知識」と並べている例である。「経験（または体験）と知識」は、頭の中に蓄積されるものである「知識」を、体を使って実際に行動・体感する「経験」と対比している。「技術（や）知識」の場合、「技量と知識」「技能と知識」も同様だが、「知識」を、高貴で誇れるものだととらえ、誰もが持っているわけではない「技術」と並べていると思われる。

IV. 用例の分類

上述のように、定義で言われている「情報」と、日常で用いられている「情報」とは違いがある。それでは「情報」という言葉は、どのように使われている例があるの

## 「情報」の日常的な用法からみた意味

だろうか。同じ「情報」という言葉を使っている、その指し示す意味は状況によってまちまちである。日本語の「情報」の意味の類型化の例がすでにあるが<sup>44)</sup>、ここでは「知る」という観点とその他から用例を分類した。

### A. 「知る」という観点

#### 1. 知らせるべきこと、知るべきこと

まず、「情報」が「重要なこと」という意味で使われる例があった。「重要なこと」というのは送り手側からは「知らせるべきこと」、受け手側から見れば、「知るべきこと」である。

- (1) 地震情報 (日経ビジネス 8/22)
- (2) 津波情報 (日経ビジネス 8/22)
- (3) 台風情報 (日経ビジネス 8/22; 女性自身 8/23)
- (4) 副作用情報 (読売新聞 8/6; 日経新聞 8/24)
- (5) 有用性や副作用などの情報提供 (読売新聞 8/31)
- (6) 自社製品の副作用に関する情報を載せ (読売新聞 8/6)
- (7) 情報はきちんと伝えてほしい (女性自身 8/2)
- (8) 情報が入ったのでポストします (BBS9/18)
- (9) 情報の提供を心掛ける (読売新聞 8/31)
- (10) 情報提供を呼びかける (読売新聞 8/28)
- (11) 情報公開 (読売新聞 8/9)
- (12) 官邸が情報提供 (日経新聞 8/27)
- (13) 情報開示さえやれば (日経ビジネス 8/22)
- (14) 道路表示など一つひとつの情報 (日経ビジネス 8/29)
- (15) 結果は営業店の情報として蓄積 (日経新聞 8/24)
- (16) 情報交換の緊密化 (日経新聞 8/25)
- (17) (就職の) 情報集めに奔走する (文春 8/4)
- (18) 情報はしっかり収集したい (文春 8/4)
- (19) ひとりでは収集しきれない情報 (ポスト 8/5)
- (20) 情報などは早く入手する (ポスト 8/19)
- (21) 新聞を読んで新しい情報を教えてもらっている (日経ビジネス 8/1)

(1)~(3)は「警報」とも置き換えられる、重要な伝達事項である。(5)~(13)は「情報」を「知らせるべきこと」に、(15)~(21)は「知るべきこと」に置き換えることができる。(14)は「表示 (=知らせるべきこと)」を「情報」といっている。

#### 2. 知りたいこと

受け手となる人が「知りたい」と思っていることを、

「情報」と呼ぶ場合も多い。「知りたい」のは「役立つ」からであるので、ここから、「情報」の定義に見られた「評価」の項目が出て来たのかもしれない。

- (1) 若者情報 (読売新聞 8/4)
- (2) 主婦情報 (読売新聞 8/4)
- (3) 意外なところから貴重な情報が! (女性自身 8/9)
- (4) 自分で操作して情報を引き出せる (日経新聞 8/24)
- (5) 現地に行かなくても情報を得ることができる (日経新聞 8/22)
- (6) 日本は情報を取るだけで出さない (日経ビジネス 8/22)
- (7) 情報を手に入れた (BBS9/19)
- (8) 聞いてみると情報が得られるかも (BBS9/18)
- (9) 情報を仕入れられます (女性自身 8/23)
- (10) 情報をもっている (読売新聞 8/4)
- (11) 情報を得るためには (読売新聞 8/1)
- (12) 道東で情報交換 (女性自身 8/23)
- (13) 健康、医療情報の提供 (読売新聞 8/4)
- (14) 利用者への情報提供 (日経新聞 8/24)
- (15) 情報をお届けしています (日経ビジネス 8/1)
- (16) 留学を希望している人達に情報を提供している (読売新聞 8/31)
- (17) お互いに情報を交換して (日経ビジネス 8/1)
- (18) 情報の相互提供 (日経ビジネス 8/1)
- (19) がんの情報が得られる (読売新聞 8/29)
- (20) アトピー性皮膚炎に関する最新情報を提供する (読売新聞 8/26)
- (21) ドライバーに情報をリアルタイムで提供する (読売新聞 8/10)
- (22) 海外情報の提供サービス (読売新聞 8/10)
- (23) 情報のリクエストを受け付ける (読売新聞 8/2)
- (24) 金融情報サービス (文春 8/11)
- (25) 企業情報 (日経ビジネス 8/8; 8/22)
- (26) 証券情報 (日経ビジネス 8/22)
- (27) 産業情報 (読売新聞 8/27)
- (28) 営業情報 (日経新聞 8/25)
- (29) 生活情報 (日経ビジネス 8/29; 読売新聞 8/26)
- (30) 暮らしの情報 (読売新聞 8/22)
- (31) 趣味・健康・お金の情報まで (ポスト 8/19)
- (32) 財テクや買い物の情報を集め (女性自身 8/9)
- (33) 診療情報 (読売新聞 8/27)

(34) 夏のスリム情報 (女性自身 8/16)

(35) アトピー情報 (読売新聞 8/26)

(1)と(2)は、「若者や主婦が知りたいこと」という意味であり、(3)～(24)は、自分やその人が「知りたいこと」、(25)～(35)は「～に役立つこと」と言い換えができる。

### 3. 知らせたいこと

逆に、受け手の意思にかかわらず、送り手側が一方的に「知らせたい」と考えているものを指すこともあるようだ。受け手側と送り手側の思惑が一致すればよいが、送り手が「知らせたい」ことを受け手が「知りたい」と思わなければ「役立つ情報」が生まれることになる。

- (1) 一方的に企業の情報を押しつける (女性自身 8/9)
- (2) 赤ブーブー通信社からの情報です (BBS9/18)
- (3) 情報を多数の相手に同時に流せる (読売新聞 8/30)
- (4) 消費者に情報を流して (読売新聞 8/8)
- (5) メーカー側の情報 (日経新聞 8/24)
- (6) メーカーが提供する情報 (日経新聞 8/24)
- (7) 電話を使って情報を提供する業者向けの装置 (日経新聞 8/23)
- (8) 視聴者に一方的に情報を送るマスメディア (日経ビジネス 8/8)
- (9) 各自が思い思いの情報を流している (日経ビジネス 8/8)
- (10) 製品情報を送る体制をとった (日経ビジネス 8/8)
- (11) 新聞にでっちあげの情報を流す (文春 8/4)

### 4. 報告, 通報

そして「実際に知らせたこと」もやはり「情報」と呼ぶ。この意味は辞書などにも第一に出ているものであり、「情報」と言われてまず思い浮かぶ意味であろう。公的な「報告」の例((1)～(18))と、昔の「諜報」的な名残のある「密告」のような例((19)～(29))が見受けられた。

- (1) 現時点で入っている情報では (BBS9/16)
- (2) 現地からの情報では (読売新聞 8/6)
- (3) カンボジアからの情報によると (日経新聞 8/23)
- (4) 国連本部からの情報によると (読売新聞 8/6)
- (5) 警察当局者からの情報 (日経新聞 8/23)
- (6) 各税関からの情報 (日経新聞 8/24)

(7) 情報が寄せられた (読売新聞 8/29)

(8) 会員から寄せられた情報 (読売新聞 8/27)

(9) 情報を寄せてくれるのは一部の人 (読売新聞 8/4)

(10) そっくりさん情報 (女性自身 8/23)

(11) ひきつづき情報お待ちしております (BBS9/19)

(12) これについて情報をくれたのは1人だけ (BBS9/16)

(13) 情報が止まってしまった (読売新聞 8/29)

(14) 死傷者が出ているとの情報もある (読売新聞 8/5)

(15) ニセ情報を持ち込み (読売新聞 8/4)

(16) 情報は下から段階的に伝えられて来た (日経新聞 8/27)

(17) という情報を入手している (日経新聞 8/25)

(18) 情報の関所 (日経新聞 8/24)

(19) 談合の情報が寄せられ (読売新聞 8/31; 8/27)

(20) 談合情報が寄せられ (読売新聞 8/8; 8/2)

(21) 談合情報の信憑性 (読売新聞 8/2)

(22) 事前情報が寄せられる (読売新聞 8/31)

(23) 情報通りの業者が落札した (読売新聞 8/2)

(24) 事故原因につながる情報があつた (女性自身 8/23)

(25) 有力情報が寄せられ (読売新聞 8/10)

(26) 情報を得ての張り込み (読売新聞 8/9)

(27) 放火, 暴力事件などの情報 (ポスト 8/19)

(28) コカインを密売しているという情報があり (読売新聞 8/3)

(29) 真犯人の発見につながる情報 (文春 8/11)

### 5. お知らせ, 案内

「報告」というほどの重い意味はなく、単なる「お知らせ」とか「案内」「紹介」といった言葉に置き換えられる「情報」も多い。

(1) イベント情報 (BBS9/18)

(2) 雑誌情報 (読売新聞 8/27; 8/6)

(3) TV 情報 (文春 8/11)

(4) 娯楽情報 (日経ビジネス 8/22)

(5) 住宅情報 (読売新聞 8/31; 8/5; 日経新聞 8/22)

(6) 地域情報 (読売新聞 8/4)

(7) 商店街情報 (日経新聞 8/24)

(8) 物件情報 (日経新聞 8/22)

(9) クラブ情報 (文春 8/4)

## 「情報」の日常的な用法からみた意味

- (10) テレビ名画情報 (文春 8/4)
- (11) 新製品&再生産情報 (BBS9/18)
- (12) ファッションの情報 (読売新聞 8/2)
- (13) 特売品情報 (日経ビジネス 8/22)
- (14) 結婚情報サービス (日経ビジネス 8/29)
- (15) どこで一番安く買えるかという情報 (日経ビジネス 8/22)
- (16) マル得ビデオ情報 (女性自身 8/9)
- (17) 開店情報 (文春 8/4)
- (18) 悩みに嬉しい情報! (女性自身 8/2)
- (19) ゴキゲン情報 (展覧会招待券など) (女性自身 8/2; 8/16; 8/23)
- (20) トクする夏情報 (女性自身 8/23)
- (21) たのしい情報 (プレゼントなど) (文春 8/4)
- (14) この記事は、興味本位の情報 (文春 8/25)
- (15) ビジネス紙の情報を読むことができる (日経ビジネス 8/22)
- (16) 新聞に出ていない情報も読める (ポスト 8/5)
- (17) 情報のコード番号が明記してある (ポスト 8/5)
- (18) 以前から…という情報はありました (女性自身 8/9)
- (19) 情報もありましたが、現物を見たことはありません (BBS9/19)
- (20) 資金投入の情報などにより (読売新聞 8/10)
- (21) 「侵攻準備」の情報を否定した (読売新聞 8/4)
- (22) 資金難の情報がある (読売新聞 8/2)
- (23) 核物質がストックされているとの情報がある (日経新聞 8/25)

(1)~(16)は、その内容の案内や紹介などであって、(17)~(21)は、「お知らせ」という言葉の代わりに使われている。

## 6. 話、説、噂

個人にしろマスコミにしろ誰かが話したときにその「話」を便宜的に「情報」と呼んでいる例も見られた。新聞や雑誌なら「記事」にあたる ((8)~(17))し、不特定多数の人が言っていれば「通説」「噂」((18)~(30))にあたる。

- (1) という情報を聞いたような気がします (BBS9/18)
- (2) この情報の真偽を知っている方 (BBS9/18)
- (3) 私の知っている限りの情報 (BBS9/19)
- (4) との情報伝えられたことから (読売新聞 8/9)
- (5) 一部には「…」との未確認情報もある (読売新聞 8/2)
- (6) そういった情報は聞いていない (日経新聞 8/25)
- (7) 夫人に関する情報は明確ではないが (ポスト 8/5)
- (8) ビューティ UP 情報満載のカタログ (女性自身 8/9)
- (9) (本に) 役立つ情報のってますね (女性自身 8/23)
- (10) 情報の質を保つ (読売新聞 8/29)
- (11) 子供向けの情報 (読売新聞 8/4)
- (12) テニス、野球などに関する各種情報を満載 (日経新聞 8/23)
- (13) (新聞の) 情報が真実かどうか (文春 8/4)

- (24) 情報によれば、…ことになっている (ポスト 8/5)
- (25) …という情報は誤り (ポスト 8/5)
- (26) 「イジメ」の情報 (ポスト 8/12)
- (27) という情報をキャッチした (ポスト 8/12)
- (28) 不自然死情報が囁かれて (ポスト 8/19)
- (29) トラブルを起こしたという情報もあります (文春 8/11)
- (30) この情報の信憑性はどうか (ポスト 8/19)

## 7. 知っていること

自分が「知っていること」という意味で、「情報」が使われていることもあった。これは、「知識」という言葉の意味もはっきりしていないので断定はできないが、「知識」と言い換えることができるものもありそうだ。

- (1) これだけしか情報はないのですが (BBS9/19)
- (2) 情報でもあればお教えください (BBS9/19)
- (3) 彼女に関する情報を何でもいいですからください (BBS9/19)
- (4) 同庁では、組織暴力に関する情報を一本化し (読売新聞 8/28)
- (5) 情報や技術をフル活用する (読売新聞 8/27)
- (6) 市民に情報提供を呼びかけている (読売新聞 8/9)
- (7) 商品情報を接客に生かす (日経新聞 8/27)
- (8) 顧客情報の管理 (日経新聞 8/24)
- (9) 他の経営者と情報交換をし (日経新聞 8/24)
- (10) 互いの情報も交換し (日経新聞 8/22)
- (11) 情報をプールして (ポスト 8/5)

## 8. 状況, 事柄の内容

「情報」という言葉が「情状の報知」から来ていると言われるように、「状況」を表すこともある。場の「状況」または、物事の「内容」、「事情」といった言葉と置き換えができるといえる。

- (1) 気象情報 (読売新聞 8/29; 8/27)
- (2) 火山観測情報 (読売新聞 8/28)
- (3) ストの周辺情報 (読売新聞 8/27)
- (4) 花粉情報 (日経ビジネス 8/22)
- (5) 交通情報 (読売新聞 8/30; 8/2; ポスト 8/5; 日経ビジネス 8/22)
- (6) 混雑情報 (読売新聞 8/26)
- (7) 飛行機フライト情報 (日経ビジネス 8/22)
- (8) 新幹線空席情報 (日経ビジネス 8/22)
- (9) 予約や空き室などの情報 (読売新聞 8/4)
- (10) 株価の情報 (ポスト 8/5)
- (11) 株式情報 (ポスト 8/12)
- (12) 捜査情報を流す (読売新聞 8/30)
- (13) 家族関係の情報 (ポスト 8/5)
- (14) 内幕情報 (ポスト 8/19)
- (15) 女性組織やリーダーの情報 (読売新聞 8/8)
- (16) 北京情報として伝えたとところによると (読売新聞 8/5)
- (17) 新幹線が大雨でストップしているとの情報を知りました (BBS9/19)
- (18) との情報の詳細に説明した (日経新聞 8/24)
- (19) 議会, 審議会, 公聴会にもっとカメラを入れ, ナマの情報を国民に提供 (日経ビジネス 8/22)
- (20) この旅行代理店の情報をご存じありませんでしょうか (BBS9/18)
- (21) 作者の他の作品の情報をご存じの方 (BBS9/18)
- (22) 製品の情報を調べる (ポスト 8/5)
- (23) 商品情報 (日経新聞 8/27)
- (24) 研究情報 (日経新聞 8/27)
- (25) 顧客情報 (日経新聞 8/26)
- (26) 薬剤調合情報 (日経新聞 8/24)
- (27) 検査・診断・治療法のそれぞれについて, 情報を解説 (文春 8/25)
- (28) この件に関してもっと詳しい情報が知りたい (ポスト 8/5)

(1)~(18)は、「情報」をそのまま「状況」に置き換えることができる。(19)は、「カメラを入れて」とった会の状況に対して「ナマの情報」という言葉を使っている。(20)

~(28)は「内容」「事情」を表す「情報」の例である。

## B. コンピュータ関連

## 1. コンピュータ

「情報」=「コンピュータ」というとらえかたは大きな流れである。「コンピュータ」の代わりに「情報」を用いる熟語が多かった。

- (1) 情報処理技術 (読売新聞 8/28)
  - (2) 音声などの情報処理 (日経新聞 8/23)
  - (3) 情報機器 (読売 8/27; 8/10; 8/5; 8/2; 日経新聞 8/24)
  - (4) 情報端末 (日経新聞 8/27)
  - (5) 情報武装 (日経新聞 8/25; 8/24)
  - (6) 情報化武装 (日経ビジネス 8/1)
  - (7) 情報ネットワーク (読売新聞 8/28; 8/10; ポスト 8/5)
  - (8) 情報網 (日経新聞 8/27; 8/22)
- (3)(4)はコンピュータのことであり, (5)~(6)はコンピュータを利用することである。

## 2. コンピュータの処理対象

データや信号など, コンピュータ内に蓄積されているものやコンピュータによって伝送されるもの, 通信回線の中を通っているもの等を指して「情報」と言っている例も多かった。

- (1) コンピューターに収められた情報 (読売新聞 8/8)
- (2) CD-ROM に記録してある情報 (日経新聞 8/27)
- (3) 情報を送る光通信 (読売新聞 8/29)
- (4) 大容量の情報を双方向で送受信できる (日経新聞 8/24)
- (5) 情報を流せるファクシミリ通信網 (読売新聞 8/30)
- (6) 情報は表示されている (BBS9/21)
- (7) 情報発信元 (BBS9/17)
- (8) コンピューターが情報をやり取りしている (日経ビジネス 8/8)
- (9) 1000倍から1万倍もの情報量が伝達可能 (ポスト 8/12)
- (10) データベースに情報を追加, 収録中 (日経ビジネス 8/1)

## C. その他

## 1. 資料

「情報」を含む物理的媒体である「資料」を「情報」と呼んでいるものもあった。

- (1) 情報は人の手による写本で複製する（読売新聞 8/28）
  - (2) 活字情報への翻訳（読売新聞 8/28）
  - (3) 雑誌など活字媒体の情報（日経ビジネス 8/29）
  - (4) 行政情報をデータベース化（日経新聞 8/27）
  - (5) 情報をオンライン化する（日経新聞 8/24）
  - (6) 情報はほとんどが英語。（日経ビジネス 8/8）
  - (7) 日本語か英語の情報を選べる（日経新聞 8/27）
  - (8) 聖書をはじめとする「情報」（読売新聞 8/28）
  - (9) 女性情報も、紙の本から電子のネットに移りつつあり（読売新聞 8/8）
  - (10) 情報の整理がうまい（日経ビジネス 8/22）
  - (11) 情報の仕分け（日経ビジネス 8/22）
  - (12) いただいた情報は、依頼者に送付いたしました（BBS9/19）
  - (13) 情報公開請求（＝精算関係書類）（読売新聞 8/9）
  - (14) 情報（国別報告書）を送付する（読売新聞 8/1）
  - (15) 月例経済報告や国民所得統計などの情報（日経新聞 8/27）
  - (16) 公開している文書などの情報を（日経新聞 8/26）
- (10)～(12)は、媒体である紙の扱い方を述べている。  
(13)～(16)の「情報」は、書類そのもののことである。

## 2. 漠然としているもの

Bの1でも触れたが、「コンピュータ」という意味に限らず、コンピュータを中心にした漠然としたものを指す「情報」もある。物質でも、人でも、ものでもないとならえ難い何かを指して「情報」という言葉を使うことがある。その例が(1)～(5)である。

- (1) 人、モノ、情報の発信拠点に（読売新聞 8/31）
- (2) 文化、芸術、情報の発信機能（読売新聞 8/1）
- (3) 情報もモノも少ないイナカ（ポスト 8/19）
- (4) 鎖国による情報断絶（読売新聞 8/8）
- (5) （ヴェトナムは）情報も知識も伝わっていない国（読売新聞 8/6）
- (6) 高度情報通信社会（読売新聞 8/31； 8/3）
- (7) 高度情報化社会（読売新聞 8/10； 8/3）
- (8) 情報化社会（文春 8/11； ポスト 8/5； 読売新聞 8/6； 8/4； 8/3）
- (9) 情報社会（ポスト 8/12）

- (10) 情報化時代（読売新聞 8/10）
- (11) 情報化（読売新聞 8/29； 8/3； 日経新聞 8/27）
- (12) 高度情報化産業（読売新聞 8/7）
- (13) 情報革命（読売新聞 8/28； ポスト 8/5）
- (14) 情報スーパーハイウエー構想（読売新聞 8/27）
- (15) 情報インフラ（日経新聞 8/27）
- (16) 情報部（読売新聞 8/26）
- (17) 情報分野（読売新聞 8/1）
- (18) 情報活動（文春 8/11）
- (19) 情報文明（日経ビジネス 8/29）
- (20) 情報後進国（日経ビジネス 8/22）
- (21) サービス、情報などソフト産業（読売新聞 8/6）
- (22) 情報国際協力室（読売新聞 8/3）
- (23) 情報空間（ポスト 8/5）
- (33) 情報界（日経ビジネス 8/29）

(6)～(11)の「情報化」などは、狭い意味ではコンピュータを使う「コンピュータ化」を指すこともあろうが、それよりも、コンピュータ化を中心に発達した社会やシステム、産業などを漠然と表していると言える。(18)や(19)などの言葉に至っては、あまりに曖昧で、意味を明確にできない。

## 3. 強調

単に強調の意味で付加されている場合もある。

- (1) 情報番組（読売新聞 8/30； 8/26）
- (2) 情報ライブラリー（読売新聞 8/28）
- (3) 情報本（ポスト 8/19）
- (4) 情報データベース（日経新聞 8/27； 日経ビジネス 8/1）
- (5) 情報調査（読売新聞 8/5）
- (6) 住宅情報案内（読売新聞 8/31）
- (7) 出版情報（読売新聞 8/28）

番組、ライブラリー、雑誌、本、データベースなどは「情報」の媒体であるのは当然であり、調査は「情報」を集め検討する行為であり、始めに「情報」という言葉をつける必要はない。(6)の「情報」はここでは「案内」と同義なので重複する。(7)は「出版物」のことなので、「情報」自体にたいした意味はない。

## V. 日常の「情報」概念

### A. 既存の定義との比較

「情報」の既存の定義から問題となる点を4点挙げ、日常における「情報」の使用法と比較した結果、以下の

ことが分かった。

まず「評価」の点についてであるが、今回の調査では、一般的には「評価」という要素が「情報」にとって、不可欠なものではない。役に立たない「情報」も存在し、日常の用法では「情報」の中には必要なものとそうでないものがあると考えられているようだ。また、内容の正誤にはこだわっていない。必ずしも「評価」されたものだけが「情報」だという考え方はされていない。

次に、「受容」の点である。「情報」が伝えられる途中で止まったり、遮断されたりして受け手に受け取られなかった場合にも、「情報」という言葉が使われていた。受け手が受け取る前の時点で既に「情報」と呼んでいる場合も多く見られた。したがって、「受容」の有無にかかわらず「情報」というものは客観的に存在すると、日常的には考えられていると言える。少なくとも、受け取られる前や受け取られないものに対しても「情報」という呼び方をしている。

「データ」と「情報」との違いは、日常的には両者はあまり区別されず、混用されていた。両者は入れ替え可能であるが、「情報」という言葉が多用される傾向が見られ、「データ」の意味で「情報」を使う場合も多かった。ただ、統計的・数値的な内容の場合には、「データ」と呼ぶことがほとんどであった。また、コンピュータ関連の記事には「データ」が用いられやすい傾向があった。

「知識」と「情報」については、定義で主張されるような密接な関係のある例は、今回の調査では見受けられな

かった。「知識」は、誰かとやり取りできるものではなく、身につけ、体内で育て高めて行くものであるととらえられていた。一方「情報」は、与えたり交換したり検索したりするもの、つまり自分の外で流れているものであるようにとらえられている。したがって両者は全く別の性質を持ったものであり、あまり関連性はないと考えられている。

## B. 日常における意味

「情報」という言葉の日常的な使用法を分類した結果、大きな流れとして、「知る」という過程に沿ったものとコンピュータに関連したものとがあり、それらに分類できない使用例もいくつか見られた（第7表）。

まず、「知るべきこと」や「知らせるべきこと」といえる重要な伝達事項、誰かが「知りたい」とか「知らせたい」とか思うことは、実際に知るという事実がなくとも「情報」と呼んでいる。そしてそれを実際に知らせた場合には、その「知らせ（報告）」もやはり「情報」である。知らせる際の話や記事、さらに結果としての「知っていること」も「情報」と言っている。

一方、「知る」という過程とは関係なく、ある物事の「内容」や「状況」といった言葉のかわりに、「情報」を用いることもある。

「情報」＝「コンピュータ」と置き換えられる場合も多い。コンピュータ内に蓄積されたりコンピュータ間で通信されたりするものもまた「情報」である。

第7表 日常的な「情報」の意味

知る過程	a. 知るべきこと, 知らせるべきこと b. 知りたいこと, c. 知らせたいこと ↓ 知らせたこと d. 報告, 通報, 密告 e. お知らせ, 案内 f. 話, 説, 噂, 記事 ↓ g. 知っていること
h. 状況, 事情, 内容	状況, 事情, 内容
コンピュータ関連	i. コンピュータそのもの j. コンピュータで処理されるもの
k. 資料	資料
l. 漠然	物理的なモノでないもの コンピュータを中心に発達した社会やシステム
m. 強調	強調

そして、いわゆる「情報」を掲載した、物理的な「資料」のことも「情報」と呼ぶ。

さらに、コンピュータ化を軸にした、さらに広い意味の「情報化」というときの「情報」や、あいまいで意味の特定できない「情報」、強調として付加されているだけでそれ自体にはあまり意味がない「情報」なども存在する。

以上から、既存の「情報」に関する定義の多くは、「情報」の日常の用法を網羅したものではないということが明らかになる。かつて、「情報」という言葉は限られて範囲で使われていたが、今では多くの人が様々な場で使っている。「情報」が一般的になるにつれて他の言葉の代わりにこの言葉が使われてきた結果、その語義が広くなり過ぎ、従来の一面的な定義ではカバーしきれない面も出てきた。また、日本語としての「情報」は、明らかに英語の information と同じではない。

逸脱した用法は除くとしても、以上のような日常的に用いられる「情報」に共通した意味を見いだし、「情報」という言葉の新しい定義が必要になっている。

本稿の作成にあたって、資料収集から結果の解釈にいたるまでに慶應義塾大学文学部の上田修一氏に協力して頂いた。

## 引用文献

- 1) 小野厚夫. 「情報」という語の由来と変遷. 富士通ジャーナル, Vol. 17, No. 1, p. 75-78 (1991)
- 2) 長山泰介. 情報という言葉の起源. ドクメンテーション研究. Vol. 33, No. 9, p. 431-435 (1983)
- 3) 飯田賢一. 情報論の先駆者としての福沢諭吉. Library and Information Science, No. 14, p. 23-28 (1969)
- 4) 小野厚夫. 明治期における「情報」と「状報」. 論集 (神戸大学教養部紀要). No. 47, p. 81-98 (1991)
- 5) 小野厚夫. 情報小論. 国際文化学研究 (神戸大学国際文化学部紀要). No. 1, p. 1-16 (1994)
- 6) 上田修一. 情報と information の語の意味の変化. 情報の科学と技術. Vol. 40, No. 1, p. 3-6 (1990)
- 7) 越塚美加, 安藤由美子, 鈴木富美子, 武者小路澄子, 上田修一. 「情報」および「知識」という語の意味の変遷. 三田図書館・情報学会 1989 年度研究大会, 1989-11, p. 20-23 (1989)
- 8) Shannon, C. E; Weaver, W. コミュニケーションの数学的理論: 情報理論の基礎. 長谷川淳他訳. 東京, 明治図書出版, 1969, 164p. p. 14.
- 9) 北川重太郎. 「1.1 (1) 情報の概念」. 経営情報システムの開発と管理. 東京, 中央経済社, 1989, p. 1-2.
- 10) 津田良成. 「1 図書館・情報学とは」. 図書館・情報学概論第二版. 東京, 勁草書房, 1990, p. 1-38.
- 11) Artandi, S. Information Concepts and Their Utility. Journal of the American Society for Information Science. Vol. 24, p. 242-245 (1973)
- 12) Belzer, J. Information Theory as a Measure of Information Contents. Journal of the American Society for Information Science. Vol. 24, p. 300-304 (1973)
- 13) Shera, J. H. et al. Documentation in Action. New York, Reinhold, 1956, 471p.
- 14) Hayes, R. M., Becker, J. Handbook of Data Processing for Libraries. New York, Becker and Hayes, 1970. 885p.
- 15) McDonough, A. M. 情報の経済学と経営システム. 長坂精三郎訳. 東京, 好学社, 1966, 341p.
- 16) Belkin, N. J., Robertson, S. E. Information Science and Phenomenon of Information. Journal of the American Society for Information Science. Vol. 27, p. 197-204 (1976)
- 17) Brookes, B. C. 情報学の基礎: 哲学的側面. 岡沢和世他訳. ドクメンテーション研究. Vol. 32, No. 1, p. 12-23 (1982)
- 18) 梅棹忠夫. 情報の文明学. 東京, 中央公論社, 1988. 283p.
- 19) 北川敏男. 情報科学の世界像. 東京, ダイアモンド社, 1977. 180p.
- 20) Berelson, B. 内容分析. 稲葉三千男, 金圭煥訳. 東京, みすず書房, 1957. 79p
- 21) 中井浩. インデクシングの数学モデル. 情報管理. Vol. 21, No. 12, p. 947-955 (1979)
- 22) 今井賢一. 情報ネットワーク社会. 東京, 岩波書店, 1984. 215p.
- 23) 香山健一. 情報社会論序説. 中央公論別冊. 1968 年冬季号, P. 80-105 (1968)
- 24) 高橋秀俊. 「情報とは何か」. 東京大学公開講座「情報」. 東京, 東京大学出版会, 1971, p. 3-36.
- 25) 津田良成; 岡沢和世. 「1.2.1 情報とは; 1.2.2 データ」. 情報システム論. 講座 情報と図書館第 5 卷. 津田良成編. 東京, 雄山閣, 1983, p. 15-19.
- 26) 最上勝也. 「情報」ということば: マスコミ使用実態の諸相. 放送研究と調査. 1988-1, p. 32-45 (1988)
- 27) 谷口早吉. 「1.1 情報とは何か; 1.2 情報と情報資料; 1.3 情報の 3 面」. 情報調査ハンドブック. 谷口早吉; 高山正也編. 東京, 雄山閣, 1987, p. 15-26.
- 28) 北嶋彦彦. 「1.1.1 コミュニケーションと情報」. 情報提供論. 講座情報と図書館第 7 卷. 東京, 雄山閣, 1983, p. 11-15.
- 29) 瀬川正明. 新製品開発入門. 東京, 日科技連出版

- 社. 1969. 378p.
- 30) 藤本理平. 社内情報サービス. 情報管理. Vol. 22, No. 9, p. 710-719
- 31) 宮沢健一. 業際化と情報化: 産業社会へのインパクト. 東京, 有斐閣. 1988, 127p.
- 32) 岡沢和世. "I. 1.2 データと情報の概念". 情報学講義ノート〈1〉. 東京, 敬文堂, 1987, p. 2-9.
- 33) 杉村優. "I. 2.2 情報の概念". 図書館情報システム論: ドキュメンテーション活動へのシステムの接近. 東京, 日本ドキュメンテーション協会, 1982, p. 30-36.
- 34) Wiener, N. 人間機械論: サイバネティックスと社会. 池原止戈夫. 東京, みすず書房, 1954. 228p.
- 35) 野口悠紀雄. 情報の経済理論. 東京, 東洋経済新報社. 1974, 250p.
- 36) 佐々木敏雄. 情報は受け手の問題である. ドキュメンテーション研究. Vol. 26, No. 2, p. 77-79 (1976)
- 37) 加藤秀俊. 情報行動. 東京, 中央公論社. 1972. 182p.
- 38) 細野公男. "1.1 知的活動と記録情報". 情報検索. 東京, 雄山閣, 1991, p. 15-17.
- 39) 中沢俊一. 情報管理とマイクロフィルミング. 情報管理. Vol. 22, No. 3, p. 184-199 (1979)
- 40) Porat, M. U. 情報経済入門. 小松崎清介監訳. 東京, コンピュータエージ社, 1982.
- 41) Machlup, F. 知識産業. 高橋達男, 木田宏監訳. 東京, 産業能率短期大学出版部, 1969. 477p.
- 42) Gutenmakher, V. L. 電子計算機と情報処理. 河野繁雄訳. 東京, 東京図書, 1962. 203p
- 43) 井口君夫. 「情報」の定義と使用実態. 情報管理. Vol. 24, No. 3, p. 194-203 (1981)
- 44) 上田修一. "I. 情報と情報の生産・流通". 上田修一, 倉田敬子. 情報の発生と伝達, 東京, 勁草書房, 1992. (図書館・情報学シリーズ 1), p. 1-20